

日本語心理動詞の位置づけ

—動詞分類上の連続性を求めて—

趙 仲

Location of Japanese Psych-verbs

— with The Continuity of Verb Category —

Zhong Zhao

由于意义和语法上的特殊性，日语心理动词的定位及语法特征一直没有得到很好的解释。本文沿用工藤（1995）中对于心理动词（内在情态动词）的界定，在其基础之上，根据动词体的特征（aspect）将心理动词分为典型心理动词和非典型心理动词。其中非典型心理动词1在用法上呈现出与静态动词（状态动词）相似的语法特征，非典型心理动词2的用法则更接近于外在运动动词，居于中间位置的典型心理动词则是范畴内最具有代表性意义的心理动词。此种典型与非典型的划分方法及讨论方式在心理动词群研究上尚属首次。同时，通过讨论可以发现，三类心理动词的格助词使用情况、心理动词谓语句的功能表达等均带有一定的连续性。由此，本文沿用并发展了工藤提出的心理动词与静态动词和外在运动动词的具体关联方式，并通过对这种关联的进一步讨论，使心理动词成为内部规律性分布、外部与其他动词接壤的连续体，为日语学习者掌握心理动词的语法特点提供一个动态的分析视角。

关键词 心理动词，范畴，典型／非典型，连续性，动词体的对立

日本語の中で、人の内的活動を表す動詞は心理動詞と呼ばれている。これらの心理動詞は、人の内的活動を表すという意味的特徴を持っている。そして、「人物の内的世界はその人物の私的領域であり、私的領域における事態の真偽を断定的に述べる権利はその人物に専属する（益岡 1997：4）」などの語用論的な人称制限を受けるなどの文法的特徴は、普遍的に認められている。ところが、心理動詞の動詞カテゴリーにおける位置づけに関しては、未だに論争が収まっていないようである。心理動詞の位置づけが明確にされなければ、心理動詞のほかの動詞に区別される文法的特徴を把握することができない。また、心理動詞群においては、共通した文法的特徴を持っていながらも、互いに異なる特徴を持つ場合もある。この心理動詞間に見られる相違は心理動詞の下位分類を成しているが、分別せずに心理動詞を見るのでは、日本語学習者にとって、心理動詞の習得は複雑で、難問となっている。そこで、本稿では、心理動詞の位置づけに関する先行研究を見た上で、心理動詞の位置づけとそれに対する分類処理を試みる。

1. 心理動詞の位置づけに関する先行研究

心理動詞の位置づけに関しては、大体以下の四種類の観点にまとめられる。

(1) 心理動詞を状態動詞として捉える見方

角田（1991）は、二項述語の階層を分析する中、二項述語を持つ動詞を意味的に分類し、「知識」「感情」「関係」「能力」という四種類の動詞は状態述語として用いられるので、状態動詞に帰属するとしている。その内、「知識、感情」を表す動詞には、「知る、分かる、覚える、忘れる」「愛す、惚れる、怒る、恐れる」などは本稿の心理動詞にほぼ相当する。

堀川（1992）は、人間の精神的活動を表す動詞群を心理動詞と総称し、ル形で現在を表わすことができるという点で、状態動詞と共通した特徴を持つと判断している。

(2) 動作動詞（活動動詞）として捉える見方

三原（2000）は、Vendler（1967）の動詞四分類¹に従いながら、ES心理動詞²（心理動詞と略称する）が活動動詞であることを提唱している。具体的に、心理動詞は未完了の動詞であることで、到達動詞や達成動詞に属さないことが明らかになる。さらに、生産的にテイル形を作ることが出来ることによって、状態動詞でないことは証明される。また、ル形の未来性や未完了の逆接などによって、心理動詞は活動動詞であることが裏付けられている。

吉永（2008）は、「心理動詞も運動動詞の一種であり、外的活動を示す動詞に対し内的心理活動を示す運動動詞として「持続」の性質を持ち、同様の範疇に入るといえることが考えられる（p.82-83）。（中略）心理活動を意味するという性質上、外的活動の動作動詞とはもちろん異なるが、動詞の時間的性質などの動詞的性格から見た場合、動作動詞と同様の分野に入れても差し支えない（p.83）」と主張している。

¹ 活動動詞、到達動詞、達成動詞と状態動詞という四種類である。

² 「心理動詞構文とは、何らかの感情を抱く人（「経験者」）と、その感情を引き起こす原因（「対象」を含む構文）である。この構文に（1a,b）の二区分があることはよく知られている。（1a）は経験者「この子」が主語に立つ類型であり、（1b）は経験者が目的語となる類型である。他方、対象「雷」は、（1a）では目的語位置に、（1b）では主語位置にくる。以下、（1a）タイプを「ES（experiencer-subject）型」、（1b）タイプを「EO（experiencer-object）型」と呼ぶ。

(1) a. この子が雷を怖がる。

b. 雷がこの子を怖がらせる。

（益岡 1997：54）

本研究で言う心理動詞は全部ES型心理動詞である。

(3) 一部が動作動詞に、一部が状態動詞に属するという見方

原沢（2007）は、心理動詞において、スル形とシタ形で現在の内的状態を表すものを“状態動詞”として認め、その他を“動き動詞”として扱うことを提案している。

(4) 動作動詞とも状態動詞とも違う、第3の種類を立てる見方

鈴木（1976）では、心理動詞は動作性にも状態性にもなり得るので、動作状態性動詞あるいは中間的な動詞と扱われている。

具体的に、この動作状態性動詞（中間的な動詞）に共通する特徴は、「基本態すぎさらず（～スル）で現在の現象を表すことが一般的になっていることである。この点で状態性動詞に似ているが、基本態にも動作的な意味（状態の変化を表すという）がないわけではなく、また、持続態がある点で動作性動詞と似ている。（p.72）」と指摘している。

その中で、心理動詞の「見える」「聞こえる」などの《現象を感覚とむすびつけて表す動詞》、「願う」「同情する」「賛成する」「困る」「驚く」「祈る」などの《話し手の態度、主張を表す動詞》、「思う」「考える」などの《心理的内容の形式を表す動詞》は、全部この動作状態性動詞に属する。

工藤（1995）は、現代日本語の動詞をアスペクト対立の有無の観点から、3分類を行った。具体的には、スルーシテイルのアスペクト対立が典型的なかたちで成立して、時間のなかに成立（開始）・展開・消滅（終了）し、ものの動態的な運動をとらえている動詞を外的運動動詞と呼び、スルーシテイルのアスペクト対立は成立し得ない時間の中への現象を問題にしえない動詞、スタティックな動詞を静態動詞と呼んでいる。この2種類のどちらにも属さない動詞を内的情態動詞と呼んでいる（工藤 1995：70参照）。この内的情態動詞は本研究の心理動詞に相当する。

2. 心理動詞に対する位置づけの採用案

第1節では、心理動詞の認定に関する先行研究を見てきた。その中で、先行研究(1)(2)に挙げたように、心理動詞が状態動詞に帰属されようと、動作動詞に帰属されようと、当該種類の動詞に逸脱した用法を持つことが観察されている。つまり、場合によっては、状態動詞や動作動詞の性質を持っているようである。また、先行研究(3)の心理動詞を分けて見る観点に従うと、心理動詞を一つのカテゴリーとして見る立場を失ってしまう恐れがある。こうすると、心理動詞の静態動詞と動作動詞と区別された特徴が見えてこないのである。そのため、心理動詞を先行研究(4)の観点に従い、静態動詞（状態動詞）と外的運動動詞（動作動詞）との中間位置にあるという位置づけに賛同し、工藤（1995）の観点に従って、本研究の基礎とする。

上述した理由の他、工藤（1995）で提出した心理動詞の位置づけに従う理由としてもう一つの原因が挙げられる。心理動詞の特殊性に重視し、心理動詞を外的運動動詞とも静態動詞とも区別されている第三の種類の動詞として立てる必要があると前述で述べた。その上、心理動詞の特殊性は、人称とテンス・アスペクトとの絡み合いなどの文法的特徴に顕著に見られている。そこで、心理動詞に対する分析は、この点を重視しなければならない。この意味では、工藤氏が提出したアスペクト対立観点に基づく位置づけは心理動詞にとって一番ふさわしいのではないかと考えるわけである。

工藤（1995）は、内的情態動詞について、下記の特徴を指摘している。

「運動動詞と共通して、時間的展開性があるが、運動動詞＝外的事象動詞と異なり、＜思考・感情・知覚・感覚＞という人の内的事象をとらえている。時間的展開性があるがゆえに、スルーシテイルのアスペクト対立が成立するのだが、内的な思考や感情や感覚は、話し手のみが直接

感知（体験）できるものである。従って、人称性とからみあってくる。次の場合、スル（シタ）とシテイル（シテイタ）は、単純に、継続性の有無だけで対立しているとは言い難い。三人称の場合には、スル（シタ）は、基本的に使えないのである。

・わたし、あの時、驚きました。

あの時は、先生も、驚いていました。

・わたし、父は死ぬと思うわ。

父は、死ぬと思っているわ。

（工藤 1995：70）」

つまり、テンス・アスペクトと人称性との絡み合いがあるので、内的情態動詞のアスペクト対立は特殊であるということである。上述の例から分かるが、会話文において、主語が三人称である場合、文を成立させるには、普通、シテイル（シテイタ）形の補助が必要となるのである。「私は驚きました」と「私は驚いていました」との間に対立関係を成している。それに対して、「あの時は、先生も、驚いていました。」があるのに対して、「あの時は、先生も、驚きました」は小説などの地の文にしか使われないのである。アスペクト的意味から見ても、過去の完了と過去の持続や状態との対立も失ってしまうのである。つまり、主語が三人称となると、アスペクトは基準とした対立の仕方から離れているということである。

さらに、工藤（1995）では、内的情態動詞が静態動詞と外的運動動詞との中間に位置づけられる中、静態動詞と外的運動動詞との関連性について、下記のような網羅的な指摘がある。「意志的である思考動詞は、より運動動詞に近い、非意志的な知覚動詞、感覚動詞は、より静態動詞に近いであろう。（工藤 1995：78）」ところが、具体的に、内的情態動

詞がどのように静態動詞と外的運動動詞と関連づけられているのかに関しては、あまり言及されていない。

3. 心理動詞に対する再処理の提案

前節で分かるが、心理動詞の三人称主語文は、アスペクト的な特殊性を持っている。ところが、心理動詞（内的情態動詞）が静態動詞と外的運動動詞の中間位置に置かれ、特殊なアスペクト性を持つと主張する根拠はそれだけではないと考える。もう一つは、一人称主語文の特殊性である。

工藤（1995）では、内的情態動詞はスル形式では、〈態度表明文〉と〈感情・感覚表出文〉を表すことができ、シタ形式での〈(受動的)表出性/現在〉を表すことができると指摘されている（pp.91-92参照）。筆者の考えでは、この場合のスル形式と、シタ形式の特殊用法も、基本的なスル（シタ）形のアスペクトの意味を実現しないのである。つまり、スルーシテイルの完成相未来と継続相現在の対立も成しておらず、シタ—シテイタの過去のひとまとまり性と過去の持続性との対立も成していない。スル（シタ）—シテイル（シテイタ）がアスペクトの基準対立からはずれているのである。

要するに、心理動詞のアスペクト特殊性は、二つの方面に現れる。一つは、三人称主語文のアスペクト特殊性、もう一つは、一人称主語文のアスペクト特殊性である。その中で、三人称主語文に現れるアスペクトの特殊性は、心理動詞全体に通じるものであるが、一人称主語文のアスペクト特殊性は心理動詞において様相が異なっている。

そこで、心理動詞のこういう特徴に着目し、心理動詞の再処理の提案を試みる。つまり、まず、三人称でも一人称でも特殊なアスペクト対立を持つものを心理動詞の典型として扱う。それに、三人称の場合だけが

典型的なアスペクト対立を持たない、一人称の場合のアスペクト特殊性を完全に持っている、あるいは完全に持っていない動詞を非典型的心理動詞として見なす。

要するに、心理動詞の一人称の場合のアスペクト分析に従い、以下の基準を立てて、典型的と非典型的な心理動詞とに分けることを試みる。

表1 心理動詞の下位分類の基準

| | 一人称 アスペクト 対立様相 | 三人称 アスペクト 対立様相 | 一人称 + 三人称 | 典型 ($\Delta+\Delta$) か 非典型 ($\times/\bigcirc+\Delta$) か |
|---|----------------------|----------------------|-------------------|--|
| a | \times^3 | Δ | $\times+\Delta$ | 非典型 |
| b | \bigcirc | Δ | $\bigcirc+\Delta$ | 非典型 |
| c | Δ | Δ | $\Delta+\Delta$ | 典型 |

まずは、非典型的心理動詞 a を見てみる。

| | |
|----|----------------------------------|
| a. | 聞こえる、見える、匂う、ざらざらする、つるつるする、ぬるぬるする |
|----|----------------------------------|

これらの動詞は基本的に、一人称主語の場合、スル形とシテイル形のアスペクト対立が成立していないことが特徴である。具体的には、動詞の一人称スル形も一人称シテイル形も状態的な意味を表しており、スル形とシテイル形のアスペクト分化が見られなくなる。例えば、「山が見える」も「山が見えている」も描写的な表現である。こういう時に、スル形もシテイル形も時間的展開性を失い、時間に縛られなくなるのである。成立した文の機能は状態描写に転移したように思われ、スル形とシテイル形のアスペクト的動きは無くなってしまふのである。

3 符号の意味の説明： \times —アスペクト対立を完全に持たない； \bigcirc —アスペクト対立を完全に持つ； Δ —アスペクト対立を特殊な形で捉えられる。

続いて、非典型的心理動詞 b を見てみる。

| | |
|----|----------|
| b. | 諦める、反省する |
|----|----------|

b 類の動詞は一人称主語文のスル形とシテイル形が外的運動動詞と同じように成立する動詞である。具体的には、これらの動詞は、スル形で基本的に完成相未来を表し、シテイル形で継続相現在あるいは結果持続を表す。シタ形が完了的な過去を表し、シテイタ形が過去の持続を表している。例えば、「就職を諦める。」は、「諦める」という心理活動をこれからすることを表し、「就職を諦めている」は、「諦める」という心理的な変化が起こった後の状態持続を表す。「反省します」は、「これから反省します」という未来のことを表し、「反省している」は「今、反省中」の意味を表す。つまり、一人称文の場合、「食べる」「変わる」など外的運動動詞と一緒に扱われてもいいということである。

一方、c 類の典型的心理動詞は特殊な形で対立している動詞である。

| | |
|----|--|
| c. | むかむかする、いらいらする、はらはらする、くらくらする、あきあきする、せいせいする、どきどきする、困る、助かる、まいる、弱る、望む、憧れる、うんざりする、恐れる、感心する、感動する、苦しむ、後悔する、嫉妬する、心配する、なやむ、迷う、滅入る、喜ぶ、呆れる、安心する、驚く、がっかりする、退屈する、びっくりする、ほっとする、痛む、疼く、痺れる、疲れる、ふるえる、ほてる、思う、分かる、感じる、察する、考える、疑う、信じる、恨む、軽蔑する、同情する、憎む、感謝する、敬服する、期待する、願う、祈る |
|----|--|

具体的には、c 類動詞のアスペクト特殊性は以下のような現れ方がある。

- ① 一人称主語の場合、スル形が繰り返しや小説の地の文の叙述、条件文の主文や上下文脈の未来コンテキストの時しか使われないのである。例えば、「そうされたら、こっちは悩みますよ」のような条件

文では、未来を表すことができる。それに、「私はそのことで悩んでいる。」と基本的にアスペクトの対立が成立する。ところが、会話文において、「私はそのことで悩む。」とは言えないのである。なぜかという、スル形は一般的に未来として解釈されるのであるが、「悩む」などは、自分の感情といっても、制御できないので、特定のコンテキストが無い限り、自分の未来における感情についてなんとも言えないからである。そのため、スル形とシテイル形は基本的なアスペクト的機能を果たすことができるが、内的意味によって、スル形の働きは意味的な論理性に合わないので、文が成立しないことになっている。つまり、スルーシテイルのアスペクト対立は複雑で、特殊性を持っている。このような動詞としては、「悩む」「苦しむ」「後悔する」などが挙げられる。

- ② スル形やシタ形で、現場における感嘆調の発話を表すことができる動詞がある。「ああ、いらいらする。」や「あっ、びっくりした。」のように、一人称のスル形やシタ形では、瞬間的な現在を表すことができる。文の構造としては、一語文的に使われることが多い。この場合、スル・シタ形は完成相未来・過去を表さず、即時的現在を表すのである。そのため、スルーシテイルの形式的な対立を持っているが、文法的に完成相と継続相との対立は成立していないのである。いわゆる、特殊な形の対立を持っているとのことである。これらの用法を持つ動詞は、「困る」「驚く」「いらいらする」「びっくりする」などがある。
- ③ スル形で現在の態度表明を表す。例えば、「～と思う」「～と考える」の形で、自分の発話現在の態度を表す。こういう場合、動詞が遂行的な性質を持つとされている。つまり、「～と思う」と発話する時間は「～と思う」という心理活動が成立する時間をも指す。つ

まり、[発話内容＝活動自体]である。スル形による表現は、今現在の態度表明となる。シテイル形となると、前から持ってきた態度や思想を現在に表すことになっている。要するに、スル形とシテイル形とのアスペクト対立は特殊な形で成立しているのである。この用法を持つ心理動詞としては、「思う」「考える」「感じる」などが挙げられる。

- ④ スル形で完成相未来ではなく、現在の対人的感情表出を表す動詞がある。これらの動詞は、「誓う」のような遂行動詞に似た用法を持っている。遂行動詞が心理動詞の領域にすでに浸透している例と見ても差し支えない。③は思考的な遂行を表すと言うならば、④は感情に基づく感情・行為的な遂行を表す。聞き手に向かっての感情的表出を表すので、聞き手への強い感情の打ち明けや、聞き手に分かってほしいという強いアピールの気分が含まれている。例えば、「感謝する」は「助けてくれたことに感謝します。」において、「将来感謝の意を表す」という意味ではなく、今現在感謝の気持ちが湧いて来ることを表す。この時、「感謝しています」は「感謝」の気持ちの続く状態を表すのに対して、スル形による表現は今からそうアピールしたい現時点の気持ちを表す。そういう意味で、スルーシテイルの特殊な対立関係を持っていると言える。このグループの動詞には、「感謝する、恨む、祈る、憎む」などがある。

上述した①～④の心理動詞は、それぞれ異なる形でアスペクト的特殊性を持っているが、a類ともb類とも違って、一人称文におけるスルーシテイル形のアスペクトの対立ぶりは特殊であることは共通している。その中に見られる具体的な差異は、心理動詞の内部変化と連続性を見ているが、それに関しては、別稿を用意して論じることにする。

本稿としては、①～④という一人称でも三人称でもアスペクトの対立

が特殊な心理動詞は典型的な心理動詞として扱い、その他の心理動詞は非典型心理動詞として見なすことにしている。

表2 心理動詞の下位分類

| | 一人称 | 三人称 | 動 詞 例 |
|--------|-----|-----|--|
| 非典型的 a | × | △ | 聞こえる、見える、匂う、ざらざらする、つるつるする、ぬるぬるする |
| 非典型的 b | ○ | △ | 諦める、反省する |
| 典型的 c | △ | △ | むかむかする、いらいらする、はらはらする、くらくらする、あきあきする、せいせいする、ときどきする、困る、助かる、まいる、弱る、望む、憧れる、うんざりする、恐れる、感心する、感動する、苦しむ、後悔する、嫉妬する、心配する、なやむ、迷う、滅入る、喜ぶ、呆れる、安心する、驚く、がっかりする、退屈する、びっくりする、ほっとする、痛む、疼く、痺れる、疲れる、ふるえる、ほてる、思う、感じる、分かる、察する、考える、疑う、信じる、恨む、軽蔑する、同情する、憎む、感謝する、敬服する、期待する、願う、祈る |

4. 提案の合理性分析——心理動詞の静態動詞と外的運動動詞との連続性探究

心理動詞が静態動詞と外的運動動詞との中間位置にあるので、典型的な心理動詞は、中間的な用法を持ち、非典型的な心理動詞は、外側にある静態動詞と外的運動動詞に近い用法を持つことが予想される。本節では、前節で提出した心理動詞に対する分け方を格使用、文機能、と意志的特性の側面から簡単に考察し、静態動詞と外的運動動詞との連続性を見ることで、提案の合理性を検討する。

(1) 格使用の傾向

少納言⁴から心理動詞の格助詞使用実態を調べたところ、三つのグループの心理動詞の格助詞使用は、以下のような規則性を持っている。

つまり、a類心理動詞はガ格（一項）が使われやすく、c類心理動詞はガ格（一項）、ニ格（二項）、ヲ格（二項）が使われやすく、b類心理動詞はヲ格（二項）が専用されているということである。照応的に、静態動詞の格助詞は、ガ格（一項）の使用がほとんどである。これは、心理動詞のa類に似ていると言える。また、心理動詞a類は、経験者主体が文中に現れないことが一般的である。主体を顕現化するには、「経験者＋に／には」が必要とされる。例えば、「ヒトにナニが見える」のような表現である。それと似たように、静態動詞の中で可能という特性を表す「話せる」「泳げる」なども、「ヒトにナニが話せる」という構文が用いられることができる。これは両者の共通点として見られる。一方、心理動詞b類は、ヲ格を専用する傾向が見られる。それは、外的運動動詞の他動詞がヲ格（二項）を使用することと共通している。そこで、a類の格使用は静態動詞に近く、b類の格使用は外的運動動詞に近い傾向があるのではないかと思われる。

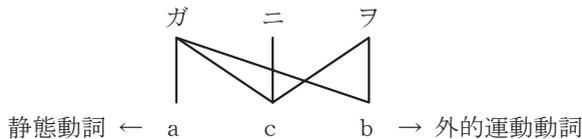


図1

(2) 文機能の傾向

人称制限を受けながら会話文に使われる時の心理動詞文の働きは特殊性がある。ここで、簡単に、文の働きに現れる各類の心理動詞の様相と

⁴ 少納言というのは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトが共同で開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）のデータを検索できるコーパスのことである。

静態動詞・外的運動動詞との関係を見て行く。

a類の心理動詞文は、基本的に、物事の性質や特性を表すもの——「属性」と、物事を説明的に描くもの——「描写」を表す。例えば、属性：「ホテルの庭の先に道をはさんで公園の池が見える。」(『くれなる』)；描写：「濡れないと切れ込みから壺口が擦れて腫れ上がる。布海苔はぬるぬるしている。」(『富札を斬る』)

b類の心理動詞文は、未来における心理活動を意志的に表出するもの——「意志表出」と、「描写」の文機能を持っている。例えば、未来的意志表出：「僕ならアリクイは諦める。アリクイは諦めて、ウォンバットにする。」(『Missing』)；描写：「色々にご迷惑をお掛けしましたっ。反省しています。ごめんなさい」(『精神外科医』)

c類の心理動詞文には、受動的な感情や感覚を現時点で表出するもの——「感覚・感情表出」、「描写」、自発的な思考的な態度を表すもの——「態度表明」と、人に向かって感情を意志的に表出するもの——「感情表出」がある。例えば、感覚・感情表出：「ああ、疲れた。トミちゃん、なにか食うものないか」(『青春の門』)；描写：「ファルージャのことを誰もがとても悲しんでいる。」(『クルド、イラク、窮屈な日々』)；現在態度の表出「なにか、あなたにいたいことがあるんだと思う」(『クリスマス・ボックス』)；対人的感情表出「陳警部、同僚を代表して歓迎します」「華警部補、協力感謝します」(『上海の紅い死』)

一方、静態動詞の場合、「中国語が話せる」「そこに山がある」などの、属性の用法が多く見られるのに対して、外的運動動詞の場合、「私は行きます」「彼はご飯を食べている」のような意志表出や描写の機能が多く見られる。そこで、a類は静態動詞に近接する用法を持ちやすいのに対して、b類は外的運動動詞に近接する用法を持ちやすいと言えよう。

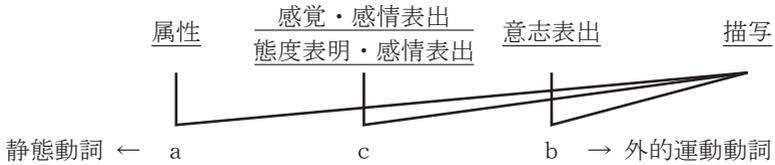


図2

(3) 意志的特性

心理動詞が人の内的活動を表すので、その経験者や活動の主体が人であることは疑いのないことである。そのため、その活動の成立にあたり、人がどれだけ参与しているか、その参与の仕方が関係している。今の段階では、意志的特性⁵と仮称することにする。

a類の心理動詞には、属性を表すものが多いので、意志的特性はゼロである。例えば、「ホテルの庭の先に道をはさんで公園の池が見える。」がほとんどヒトの参与がないぐらい、「そこにモノを見ることができる」という属性を表す。つまり、意志的特性がゼロである。

b類の心理動詞には、意志的な心理活動を表すものである。例えば、「僕ならアリクイは諦める。アリクイは諦めて、ウォンバットにする。」つまり、意志的特性が強いのである。

c類の心理動詞は、無制御と自発の心理活動を表すものである。例えば、「ファルージャのことを誰もがとても悲しんでいる。」は何かを原因で、自分で制御できない悩みという気持ちを表す。「なにか、あなたにいいたいことがあるんだと思う」は、自発的な思想・考えを表すが、自分が持っている意見でありながら、意図的にそういう意見を持つわけで

⁵ 意志性は基本的に動作主が動作を故意的にするか否かに対する判断であるが、本研究では、故意的であるかどうかを含めて、その前の段階もあるように思われ、自発的なものや制御不可能なものなどがあって、直接に意志性と呼ばず、取りあえず意志的特性と仮称することにしたのである。

はない。従って、c類心理動詞の意志的特性はa類とb類の間にあると考えられる。

一方、静態動詞のほうは、意図的にそうする表現は非常に少ないのである。それに対して、外的運動動詞は人を主語とする場合、意図しないでしたことを言うものもあれば、意図的にそうすることを言うものもかなりある。そういう意味で、a類に静態動詞、b類に外的運動動詞との近接性が多少に見られると言える。

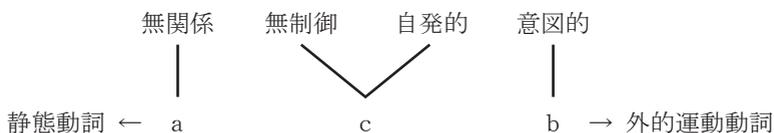


図3

こうして、厳密な近接法ではないが、基本的に、a類の非典型的な心理動詞は静態動詞、b類の非典型的な心理動詞は外的運動動詞に近接する用法を持つ傾向が見られる。それに、c類の心理動詞は中間的なものであり、心理動詞として典型的な振舞を呈していると理解できる。

5. まとめ

本稿は、心理動詞を典型(c)と非典型(a、b)とに分け、それに、非典型的心理動詞をa、bに分けるという分類の提案を試みた。それに、格使用、文機能、意志的特性を媒介にして、非典型的心理動詞のa類はより静態動詞に近く、非典型的心理動詞b類はより外的運動動詞に近く、典型的な心理動詞cは中間的な位置を占めていることを検討した。そこで、c類を中枢的な心理動詞とした上、非典型的な心理動詞を経由して、心理動詞を静態動詞と外的運動動詞と連続的に捉えられると考える。

参考文献

- 小野正樹 (2000) 「「ト思う」述語文の情報構造について」, 『文藝言語研究』, 言語篇 38, pp.57-70.
- 小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』, 東京: ひつじ書房.
- 小野良美 (1995) 「日本語の他動性—意志性を中心に—」, 英米文学研究 31, 梅光女学院大学英米学会. pp.265-279.
- 金水敏 (1989) 「「報告」についての覚書」, 『日本語のモダリティ』, 東京: くろしお出版. pp.121-129.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, 東京: ひつじ書房.
- 桑山京子 (2007) 「思考動詞「思う」の文末表現について」, 『国文学論叢』 52, pp.127-140.
- 小竹直子 (2011) 「日本語心理述語文のアスペクト: 話者による事態の捉え方の観点から」, 博士論文. 広島大学大学院・教育学研究科.
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, 東京: 秀英出版.
- 佐藤響子 (1997) 「二格名詞句をとる心理動詞」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』 48, pp.117-138.
- 佐藤裕美 (2009) 「統語構造における認識のモーダルと「思う」の主語人称制限」, 『人文研究』 169, pp.51-86.
- 鈴木重幸 (1976) 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について——～スルの形と～シテイル形」 『日本語動詞のアスペクト』, 東京: むぎ書房.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, 東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, 東京: くろしお出版.
- 原沢伊都夫 (2010) 「心の状態を表す動詞の再分類」, 『静岡大学国際交

流センター紀』 4, pp.69-79.

東弘子 (1999) 「感情表出文」, 『自然言語処理 = Journal of natural language processing』 6(4), pp.45-65.

堀川智也 (1991) 「心理動詞のアスペクト」, 言語文化部紀要21, 北海道大学. pp.187-202.

益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」, 『視点と言語行動』. 東京: くろしお出版. pp.1-11.

三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」, 日本語科学 8, pp.54-75.

宮崎和人 (2001) 「動詞「思う」のモーダルな用法について」, 『現代日本語研究』 8, pp.111-136.

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 東京: 明治書院.

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』, 東京: くろしお出版.

吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』, 大阪: 和泉書院.